（別紙２）

審査の結果の要旨

氏名　磯前順一

磯前順一氏の「近代日本の宗教言説とその系譜――宗教・国家・神道」は、明治維新以後、西洋から輸入された「宗教」概念が定着し、「宗教」や「神道」をめぐる学問的言説が宗教学や神道学などの形で広められていく過程をたどった言説史研究の成果で、この分野のパイオニア的業績というべきものだ。１９８０年代ごろまでは、「religion=宗教」の概念は自明のものとして受け止められていた。だが、その後、欧米の研究者により、この概念は西洋近代という特定の文化的環境の下で形成され、それが世界に広められていったものであることが明らかにされてきた。磯前氏はこうした宗教概念論をめぐる、ここ数十年の世界的な研究史を振り返り、その要点を手際よく紹介している。

この宗教概念論の視座から近代日本の宗教言説に光を当てようとした業績は乏しく、本論文は未開拓の領野に取り組むものであることが示される。明治維新後の日本でも、キリスト教、とりわけプロテスタントの思想構造を濃厚に反映し、実践の側面を軽んじて言語化された信念体系としての宗教に高い価値があるとするとともに、宗教を内面の事柄として捉えようとするような近代的宗教概念が広められていく。そのおおよそをたどりながら、磯前氏は近代的宗教言説の定着に大きく貢献した宗教学の形成過程に光をあてている。明治２０年代に井上哲次郎が行った「比較宗教及東洋哲学」の講義では哲学に劣るものとして宗教が克服されるべきものとして扱われているが、１９００（明治３３）年の姉崎正治の『宗教学概論』では人間の心に本来的に具わった高次の権能として宗教が捉えられている。姉崎の場合、このような宗教への好意的理解と国家のための諸宗教の協力体制の構築が表裏一体のものだった。

近代日本国家体制における宗教学と宗教言説の機能は、宗教学とともに神道学の形成過程をたどることでさらに見えやすくなる。そこで磯前氏は姉崎と同様、井上哲次郎門下で学問的自己形成を行い、最初は国学研究や国民道徳論の形成に尽力した田中義能が、神道学の形成に寄与し、大正期には東京帝国大学の神道研究室の教官として神道学の主要な担い手となっていく経緯を明らかにしている。その際、宗教と道徳を区分し神社を道徳に類別していく議論や、神道を宗教として論ずることと「神社非宗教」説を両立させる議論に宗教学、神道学がどう関わっていったかも詳細に検討されている。

以上のように、明治２０年代から昭和初期に至る時期の宗教学・神道学の形成過程が主要な分析対象となっているが、それだけでなく、近世までの「仏法」から近代の「仏教」という言説への変化、「日本宗教史」という学知枠組みの成立、「国家神道」の歴史をどう捉えるか、記紀を弁証する学としての考古学の展開、オウム事件に至るまで日本の宗教学的な宗教理解が抱え込んだ問題など、宗教言説に密接に関連する論題がいくつか取り上げられ、日本に定着した近代的宗教言説をめぐって検討されるべき問題の広がりが見渡されている。

取り上げられている事例がどこまで代表的であるか、それぞれの事例を関連づける包括的な枠組みがどこまで明瞭に示されているかなど、設定された問題への解答の密度、深度という点ではなお多くの課題を残しているが、近代日本の宗教言説についてのパイオニア的な仕事として創意に満ちた画期的な意義をもつ業績であることは確かである。よって、審査委員会は本論文が博士（文学）の学位を授与するに値するものと判断する。